

「おいしい!」でみんながつながるまち。

産直の里内牧物語。



内牧地区は、毎年夏になると、梨やぶどうなどを求めて、多くの人でにぎわう。この地で梨栽培を始めたおじいさん、跡を継いで果樹園を守る2人のお孫さん、20年にわたって通い続けているというお得意さんに話を聞いた。

世代を超えて受け継がれる「春日部甘熟梨」のブランド

国道16号から県道春日部菖蒲線に入り、白岡市に近づくくと、道の両側に果樹園が広がる「産直の里内牧」がある。主に梨やぶどう、柿等を庭先直売しており、収穫体験ができる農園もある。

内牧地区の梨農家16軒でつくる「春日部市梨組合」では、有機肥料を使った土づくりを行い、樹上で完熟させることで甘さや風味を引き出した梨を「春日部甘熟梨」のブランド名で販売している。

内牧地区で梨の栽培が始まったのは、終戦から間もない昭和25年頃のこと。若い生産者たちが農業所得の向上を目指し、新たな特産品をつくらうと苗を植えたのがきっかけだっ



た。昭和40年代後半には市場出荷のピークを迎え、内牧地区全体で、1シーズンに2万ケース（1ケース＝5キログラム）を出荷するほどの勢いだった。

祖父が一人で植えた梨の木がいまも「森田果樹園の味」を伝える

森田果樹園は、森田潔さんが昭和34年に開園した梨農家だ。周辺の宅地化が進み、「産地直売」への変化が起きたのは昭和50年頃。森田果樹園でも、高品質の梨を軒先で販売したり、注文に応じて発送する直売が主体となった。



4月 交配



5月 摘果



8月 収穫

森田果樹園の梨畑で。毎年、1町（1万平方メートル）の畑から10～15トンの梨を収穫している。

代表的な梨の収穫期

	8月			9月			10月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
こうすい 幸水	●●●●								
ほうすい 豊水		●●●●							
さいぎよく 彩玉			●●●●						
にいたか 新高						●●●●			

現在は、潔さんの2人の孫が果樹園を支えている。ご兄弟が梨づくりを継いだのは10年前。畑で祖父から学びながら、最新の栽培技術の習得にも余念がない。兄の充さんは主に営業を担当。新たな顧客獲得に力を注いでいる。

「祖父の代からのお得意さんが代替わりし、今も販売量の7割を占めています。残りの3割が新規で訪れるお客さんです」

取材の日には、森田果樹園の梨の20年来的ファンだという戸頃義明さんが訪れていた。「春日部ホテルを育てる会」の会長を務める戸頃さんは、内牧黒沼公園でのホテルの飼育活動が縁で、森田果樹園の梨に出会った。

「茨城県の私の実家の近くにも梨の産地があるのですが、実家の兄に贈答品として森田さんの梨を送ったところ『こんなにおいしい梨は初めて』と驚いたんです。以来、会う人ごとにごこの梨を勧めるようになりました。私の森田さんへの気持ちを一言で言えば、『信頼』ですかね」

森田果樹園では、潔さんが27歳のときに植えた古木が、いまも毎年、おいしい実をつける。

弟の仁さんはこう語る。

「祖父が育ててくれた畑は内牧の宝。これからは僕たちが、産直の里内牧を守っていききたいですね」



お得意さん
戸頃 義明さん

森田果樹園(孫・兄)
森田 充さん
森田果樹園
森田 潔さん

森田果樹園(孫・弟)
森田 仁さん